

# 第8回 国際協力セミナー 報告

## 開発援助の光と影： 日本のエジプトに対する開発援助のプラスとマイナス



講師：今井正幸先生（元 日本福祉大学経済学部教授）

日時：2007年10月30日（火）17:00～

場所：柏キャンパス 環境棟7階講義室

参加者：19人

議事：

今井先生による自己紹介

- 元日本福祉大学教授
- 開発援助には国際政治論が常に付随するが加えて自分が最初に国際政治を学んだことにも依る。
- パリ大学では開発経済学として貿易、援助、投資の三位一体にすることを学んだ。

1. はじめに

- エジプトは開発援助の多くのエッセンスが含まれているため、エジプトを例に取りあげた
- 途上国へ援助は基本的に金額でとらえるという前提に立ちます。
- 視点1：開発援助の推移をたどる
- 視点2：各案件からどのような問題が起きたか
- 主旨：あらゆる開発援助（プロジェクト）に内在している問題は双方に問題があると言えます。

## II. 背景

- 1960年 OECF の援助開始、70年代半ば ODA 開始、79年 援助の本格化
- 当時( 60 - 70)人口の 99% 貧困、エジプトはアラブ諸国の主要国、アメリカの対中東政策に従って日本のエジプトに対する援助が行われた。国際援助に国際政治が関与してくる根本的理由です。
- イスラエルと単独講話をしたことからエジプトに対しアラブボイコットが起こる。これを西側諸国がカバーするという形になった
- 80年代の後半に一時中断したが、91年有償商品援助開始(輸入の代金を日本のローンで立替)

## III. 本論【エジプトへの援助の実態】

### 「有償資金について」

#### 背景

- 国のインフラを復興、開発するため 78年末に開始、当時のアメリカ大統領カーターの仲介で平和協定を結ぶ
- 長期準戦時体制で軍事予算に財が向かう、インフラなどの国づくりには予算が回らず放置された。
- 78年末以降はエジプトは直接紛争にまきこまれていない、参戦していない
- なぜスエズ運河が大切だったのか、エジプトは主要な産業がなく、国の外貨財源は 1) 出稼ぎ 2) 観光 3) スエズ運河の三本柱から成り立っていた
- スエズ運河に関する援助の問題点: 援助に関するトラブルはなし、しかし工事のトラブルは生じた。
- アスワン県サトウキビ生産改良事業( 81): 結果売り上げ収入 5 倍、生産量 7 倍。プロジェクトとしては成功しかし為替変動から債務が 10 倍に増 この案件は 02 のツーステップローンの原点になる。
- カイロ水道開発事業( 77etc.): 財務や手続きに関してエンジニア集団は無知。97 億円が宙にうく
- いきなり大工業化は不可能だが、エジプトは天然ガスに着目し新規の鉄工業に着手した
- 調達条件のタイドに関する問題と入札先行型の問題  
タイド: 援助資金の供与国だけの財・サービスの調達が適格(日本の製品、サービスのみを対象)  
LDC アンタイド: 供与国と途上国からの財・サービスの調達が適格(日本および途上国の製品、サービスのみを対象)  
グローバルアンタイド: OECD 加盟国全部と途上国からの財・サービスの調達が適格
- 日本は LDC アンタイドを行っていたが、エジプト側はジェネラル・アンタイドを求めたというのは間違い。DAC は(アメリカが主導で操作)ジェネラル・アンタイドを日本に求めた。エジプトは入札先行型であればタイドで良いとしていた。これはエジプトだけではなく、マレーシアなども同じ問題はあったが日本の制度も理解して現実的に対応してきた。
- 援助受益国のマインド(入札先行型)と日本側の LDC アンタイド(入札後行型)の食い違いへの無理解が生じた  
この問題がエスカレートして、一時エジプトに対する援助は途切れた
- そして無償資金ならタイドでも良いと妥協した援助国側の合意があるのが現状である。



#### 「無償資金」

- 大エジプト博物館建設事業( 06): 観光振興が開発援助の一方法になるという良い例
- 「顔の見える援助を」と言う名のもとで産業界は日本のプレゼンスをアピールかつ高める必要があることを喧伝した。
- 援助政策として、一国が相手国のためだけに何かをすることはありえない。ビジネスのために開発援助を行うわけではない、実践では各自の利害関係を考慮したうえ他の援助国との協調、調整マインドをもち信頼を築きながら実施するべきである。

#### IV. 次代の開発援助に携わる若者へのメッセージ

- (1) 戦後から現在に至るまで、日本は戦争に加担したことはない。しかし他国(国際社会の風潮)に巻き込まれ、結果的に戦争に加担する可能性はあるので、絶対に戦争の方向に賛同してはならない
- (2) 「和して同ぜず」同一でないものは和してないではありません。



#### 質疑応答

Q. エジプトでは社会開発基金は中小企業向け、日本は民間から調達しているが、エジプトはなぜ中小企業向けは遅れたのですか？

A. 多くの途上国は予算の余裕がないため、まづ大企業に向けて開発基金を提供している。中小企業や農民に援助資金が廻せなかったのは政府が受け皿の準備ができていないためでもある。これはエジプトだけではなく、最初はタイでも同じ現象が起きていました。これはツーステップローン(マイクロクレジット)で救っていった。エジプトも始めています。

Q. ツーステップローンなどがあるが、援助側がどこまで関わるのか？

A. まず信頼関係が大事。相手国にもシステムが存在するためそれを育てることで「おしつけ」をしてはならない。

Q. 多くの途上国では政府の役人が国民の意向を汲んでいないと思われるが、実際にどれくらい (%で)

援助プロジェクトが成功した、つまり援助が必要な人たちに援助が届いたとお考えですか？

A. 個別のプロジェクトは測定をしていますが、全体となると判断基準の問題があります。理想的水準に比したら 50%くらいでしょうか。先進国のようになりたい多くの途上国はまず大企業から着手し、中小企業、そして最後に農民に援助が普及できればという順序である。しかし援助が国民全部に行き渡るという、この課題は最初で最後の目的でもあります。

#### 参加者の感想から

- 時間の流れがそれに伴う「エジプト」という国に対する戦略的意義が一方にあり、実際に国内で行われる援助の内容が他方にあり、双方が変化していることが興味深かったです。実務として相手国とかかわりを持つ中で、両国政府や企業の間を取り持つエピソードに大変感銘を受けました。そうした「熱意」が個人のものであっても（あるいは個人のものだからこそ）相手との間に信頼関係を築けること、それが国レベルに発展する可能性のあることをうれしく思います。(M1)
- 近いようで遠い国エジプトの開発援助の裏側を、臨場感を持ってお聞きすることができ、非常に興味深かったです。若いころ開発問題を志したときは、単純に「途上国の惨状を改善したい」という思いが先行していましたが、色々と現実がわかってくると共に、「いかにして出資者である国民(国家)の利益と効果的な援助を両立させるか」に頭を悩ませるようになりました。そういった意味でも、今日の入札をめぐる駆け引きとのお話はとても参考になりました。(教員)
- 最後の質問に対する今井先生のお言葉が印象的でした。「役人が国民のニーズを汲んでいないのではないか？」という質問に対して、「それは最初にして最後の課題だ」と...。政府と国民の間だけでなく、国際協力全体の迷いや闇を表しているかのように感じました。本日は貴重なお話を本当にありがとうございました。(M2)
- タイド・アンタイトの問題など、一般に言われている話とは少し異なるところに相手側の真意があることなど、普通に勉強していたら分からないところがあって面白かったです。色々の知識も重要だけど、最終的には長年で培う信頼関係が大事という言葉が印象的で、講演を通して今井先生が情熱を持ってこのお仕事に取り組んでいらっしやったことが伝わってきました。どうもありがとうございました。(M1)
- 教科書には書かれていない、現場・現状を良く知る先生のお話は貴重で勉強になりました。特にアンタイトを望むのは途上国ではなく DAC だということには納得させられました。特定の本やマスコミだけを見るのではなく、その情報源が信用できるのか見極める目を養う必要性を感じました。貴重なお話、ありがとうございました。(M1)
- これだけ援助と関わってきた講師が、“we together”でなくてはいけないということ、分かった気がするといったのが印象的でした。経験に裏づけされたお話を聞くうちに、理論とか発言と現実の乖離が多い中で、現実と向き合うことの大変さと大切さを少しだけ感じました。また、お話の中では、要望と公式理解のギャップがとても興味深かったです。一度、ギャップができれば、それが話し合いの中で拡大していくような気がして、どうしたら、生まれたギャップを埋めてゆけるのかが気になりました。(M1)
- あまり親しみのなかったエジプトの話は大変貴重でした。自分自身にあまり中東の知識がなかったため受身で聞いていたが、今後中東についても知見を広めていきたい。最後になるが、アメリカの世界戦略を詳しく聞きたかった。(D1)
- 開発援助において利害関係や起こり得る問題について、エジプトという例を通してよく理解できました。これから自分が研究しようとしている地域についても、そういった視点をもって見てみたい

と思っています。和して同ぜず、よくかみしめて生きていきたいと思います。(M1)

- 最近、国家間の援助は「外交手段の一つ」のように見えていたので、今日の講演会のお話を聞いて、ますますその思いが強まりました。日本はアメリカ系優の情報に偏っていることや、日本の援助政策もアメリカ次第ということで、頼りなさも感じました。現場のお話が聞けたことを感謝します。ありがとうございました。(M2)
- アンタイト・タイトローンなど、円借款の基礎から、それらの利点が問題点をよく理解できました。特に、エジプトの実情から、ジェネラル・アンタイトローン推進について、逆の指摘をされていた点が特に面白かったです。(M2)
- エジプトは今まで縁が遠い国ではあったが、今日の講演をうかがってから、一層近くなったと感じた。講演をうかがった感じとして、「開発援助」には「政治」の要素がかなり強くて、「開発援助」も政治の工具になってしまった。協力の現場の大変さもよく伝わってきたと思う。(M1)
- 貴重な経験談を伺う機会を頂き、どうもありがとうございました。エジプト・中東については詳しくありませんでしたが、開発援助の現場におけるダイナミクスが伝わってきました。「光と影」の具体的事例について、他にもご紹介頂けると良かったと思います。(M2)
- I think Japanese Development Assistance should be unique. It does not have to be similar with other countries. As professor told the assistance should be used in the right area. (M2)

議事録担当:大木優利、宮本尚美(修士2年)